

所属	生涯福祉研究科 生涯福祉専攻 修士課程	修了年度	平成 24 年度
氏名	古賀 順子	指導教員	船越 知行

論文題目	障害幼児をもつ母親の自己成長感に関する研究 -育児ストレス、ソーシャルサポートとの関係を中心として-
------	---

本文概要

1. 研究目的

本研究では、障害幼児をもつことによる障害受容だけでなく自身が成長したという気持ちをもつ母親の自己成長感を中心にしてその背景要因の実態ならびに関係性を分析し、考察を行う。それによって、障害児を抱える母親の育児における有用な方向性を探る一助にすることが目的である。そのために以下の研究課題を設定した。尚、幼児とは幼児期の子どもを指し、児童とは学齢期の子どもを指す。

自己成長感、育児ストレス、SS（ソーシャルサポート）グループ（情緒的SS、道具的SS、SS源）、基本的属性の4要因を自己成長感を中心にして関係性を検討する。又、幼児の母親の将来的視点として、障害のある児童の母親も分析、考察する。

II. 研究方法

対象者は児童発達支援施設を利用する2～7歳の幼児をもつ母親、および小学校特別支援学級を利用する児童をもつ母親である。本研究では質問紙による量的調査を行った。用いた質問紙の内容は次の通りである。

1. 基本的属性（子どもの年齢、性別、診断後の年数、通園後の年数、母親の年代、出産年齢など）
2. 自己成長感尺度（既存の尺度を参考にした筆者の作成）
3. 育児ストレス尺度（既存の尺度を参考にした筆者の作成）（幼児をもつ母親のみ）
4. SSグループ尺度（情緒的SS、道具的SS、SS源）（既存の尺度を参考にした筆者の作成）

III. 研究結果と考察および今後の課題

研究結果

1. 自己成長感との関係

- (1) 幼児の母親の育児ストレスの低群は高群に比べて自己成長感が高い。
- (2) 幼児・児童の母親の情緒的SSの高群は低群に比べて自己成長感が高い。
- (3) 「安心」「見守り」等の共感的サポートを多く受けている幼児の母親は自己成長感が高い。
- (4) SS源を多く受けている幼児の母親は自己成長感が高く、個人的関わりのサポートを多く受けている児童の母親は自己成長感が高い。
- (5) 本人のきょうだいのいる幼児の母親は自己成長感が高い。
- (6) 子どもの加齢によって自己成長感はアップダウンする。

2. 育児ストレスとの関係

- (1) 通園年数によって育児ストレスはアップダウンする。
- (2) 「相談」「見守り」「安心」等の共感的サポートを多く受けている幼児の母親は育児ストレスが低い。
- (3) 個人的関わりのSS源を多く受けている幼児の母親は育児ストレスが低い。

考察および今後の課題

1. 1(3)および2(2)から、共感的サポートを多く受けている幼児の母親は自己成長感が高く、育児ストレスが低いという事が明らかになった。共感的サポートによって、自己肯定感が高くなりその変容として自己成長感が高くなると推測される。また、公的機関よりも個人的関わりのサポートを多く受けている児童の母親は自己成長感が高いという結果からも、今後は、自己肯定感を育むことができ、時間的に融通の効く支援システムの構築が必要とされる。
2. 1(6)および2(1)のようにある程度の傾向と方向性が必要な研究の場合、もう少し幅のある（青年期位まで）調査が必要である。
3. 結果が障害児の母親特有なものなのか、あるいは一般的な子育てに共通するものなのかを区別するために、定型発達児の母親の比較調査も必要である。